NPO法人
ワンダイム 海外医療協力事業

2018 2017.12.25～2018.1.4
ネパール海外医療派遣報告

皆様のお心添えにより
2,000,390 円（2017.12.25 時点）の
募金が集まりました。ご理解とご協力を頂き
誠にありがとうございました！

参加した派遣医師団紹介

左から：酒井 洋徳医師（口腔外科）、酒井 典子医師（整形外科）、寺島 左和子医師（形成外科）、榊原 政裕医師（整形外科）、団長：宮尾 陽一医師（外科）

派遣に行った場所

【派遣地】

ネパール中西部ルクム郡

チョウジャリ病院

今回の派遣の目的

1．新たに拓かれた医療協力活動の道

数回に渡る視察を行い、今回新たな派遣先として初めてネパールへの海外医療協力活動の道が拓かれました。日本から約 5,100 キロの距離にあり、美しい観光資源を持つ国ネパール。地形的特殊性・政情の不安定さなど様々な背景から経済的困難を抱え、すべての国民が満足に医療を受けられる状況ではありません。今回、地元のキリスト教 NGO(非政府組織)「ＨＤＣＳ(Human Development and Community Service)」が活動の橋渡し役となり、山間部にある「チョウジャリ病院」で、医療を受ける機会を失っている人々を対象に外科的医療の提供を行ってきました。

HDCS とは

ネパール人によるネパール人のためのキリスト教 NGO（非政府組織）で、今回の派遣先である「チョウジャリ病院」などの運営のほか、障がい児のデイケア施設等の運営を行っています。

2．今後の継続した医療派遣活動に向けて

★今回、多くの方々の募金・募心のお支えにより、予想を上回るご支援を頂くことが出来ました。目標額を上回った支援金につきましては、次回派遣へと充当し現地支援に必ず繋げていきます。

★日本から医師が行き手術するだけでなく、現地の人々と交流の機会を作り育むことが長期的な目標です。

ルクム郡はどんなところ？

ネパールの首都カトマンズから飛行機を乗継、自動車で約８時間の距離にある山々が美しい地域です。首都から離れているため、人材も物資も不足していることに加え、所得の低い貧しい人たちが多く、どんなに必要でも医療が受けられない現状を抱えています。

チョウジャリ病院について

【チョウジャリ病院】

ルクム郡にある私的病院で、３つの県の境に位置しているため背景人口はおよそ 40 万人。1995 年に開院し、現在 50 床のベッドがあり、医師・看護師を含めた 65 人のスタッフでケアに当たっています。

病院までの道のり

ちょっと恐かった長い吊り橋

病院での医療支援活動に必要なたくさんの荷物を背負い、
この長い吊り橋を渡ってチョウジャリ病院へ向かいます。

診察を希望する人々

↑【診察する酒井医師】

↑【診察を求める多くの患者】

日本からの医療チーム到着を受け、あらゆる病気を抱えた人々が救いを求め、子どもから高齢の方まで様々な患者さんが病院に来ていました。

チョウジャリ病院の様子

患者さんのほとんどは暖かい病院の外で診療を待っています。

院内

１日２回の総回診は朝９時半～と、夜 20 時半～医師が全員出席し行われています。暖房が無いので非常に寒い環境です。

現地での診察・手術の様子

↑【朝礼にて挨拶をする団長】

↑【寺島医師の熱傷処置レクチャー】

口腔外科

形成外科

整形外科

医療の提供はもちろん、現地のスタッフに技術の指導もしながら治療にあたりました。

現地での診察・手術の様子

【診察と手術のデータ】

手術した人数　　２４人

（整形外科／１４件、形成外科／７件、
口腔外科／２件、外科／１件）

↑【医師団で協力して行った多指症手術】

派遣医師団よりメッセージ

【団長：宮尾 陽一医師】（外科）

多くの支援者の皆様の祈りに守られて無事に所期の目的を果たすことが出来ました。今回のチームは海外医療の経験者揃いではありましたがネパールでの医療活動は初めてで、どんな患者さんが待っているのか現地入りまで判らずに不安が大きかったと思います。目的のチョウジャリ病院は首都カトマンズからはるかに遠い地にあり到達までが大変でしたが、僻地の病院だからこそ医療を受ける機会に恵まれない人が多いと選んだ活動地でした。5 人の医師が各々の技量を生かしながらも絶妙な協力態勢を組み、また現地の医療従事者と共同で医療活動が出来ました。帰国後の連絡で私たちがかかわった患者さん達が皆元気で退院したことを知りました。手術後の患者さんの嬉しそうな写真も届けてくれました。

愛すべき人たちにあふれたチョウジャリ病院、良きパートナーとなった現地 NGO の HDCS に感謝すると共に、そこに活動の場を与えていただいた楢戸健次郎先生に厚くお礼を申し上げます。楢戸先生は JOCS からの派遣を契機にチョウジャリ病院に長く深くかかわっておられ私たちの活動の下ごしらえをしていただきました。そして私たちの活動を支えていただいた支援者の皆様、ワンダイムの理事長、理事の諸氏、事務局の皆様に心からお礼を申し上げます。

【酒井 典子医師】（整形外科）

ネパールの山間部の医療状況を知ることができたことは最大の収穫だったと思います。ある程度確立した医療体制はできており、現地では治せないような専門的な先天異常は多くなく、（整形外科的には）現地である程度対応できている印象を持ちました。協力先の病院で、今回のような短期医療協力がどれだけニーズに合っていたかは引き続き検証を重ねる必要があり、さらに現地から求められている事と我々が出来る事をきちんと擦り合せたうえで活動を行っていきたいと考えます。再度ネパールで活動できるなら、もっとスキルを生かせる活動をしていきたいと感じました。

派遣医師団よりメッセージ

【酒井 洋徳医師】（口腔外科）

チョウジャリ病院での最初の患者さんは「下唇がん」でした。今までの海外医療活動の中で、がん患者さんに対して「異国の地では何もできなかった」という大変辛い経験があり『どうにかしてこの患者さんの苦痛を取り除きたい』との思いが強く湧き上がりました。今までの臨床経験だけを頼りに診断し、手術は可能と判断、残すは治療後のフォローと自分の気持ちだけ。宮尾団長の「患者さんの願いをかなえてあげて下さい」との力強い言葉が私の背中を押してくれました。全てのスタッフの協力の下、思い描いていた以上の結果を得る事ができ、この日ばかりは緊張感から解き放たれてぐっすりと休めた事を覚えています。

【榊原 政裕医師】（整形外科）

宮崎亮先生･安子先生がバングラデシュを繰り返し訪問して海外医療派遣を定着させました。国境を越えた医療協力がワンダイムの源流です。テロが騒がす世情の影響で、今回は図らずも、日本の医療関係者が類似の足跡を記すネパールの地を踏む機会を得ました。診療、手術、院内活動、集落訪問と駆け足でしたが、現地医師やスタッフとほぼ毎日三食を共にしての文字通り「同じ釜の飯を喰う」という交流が結んだ実は大きいものでした。役立たずになってもまた行きたい。同じくらい他の人にも訪問の機会を譲って上げたいとも思います。

【寺島 左和子医師】（形成外科）

今回の活動の中で両手両足の多指症の子供の手術が思い出深いです。手指は６本ずつ、足指は７本ずつある２歳の子供。麻酔は宮尾先生が担当してくださり、時間短縮のため両足同時に手術を行いました。左足は私と酒井（洋）先生、右足は酒井（典）先生と榊原先生のチームで行い、きれいに５本の指となりました。それとカレブ院長が外来や入院患者の対応を率先して行っており、真面目で熱心、非常に優秀な医師だなと感心しました。今回の派遣をお支え頂いた皆様に心より感謝致します。

サポートして下さった方々

左)Dr ナツ HDCS 事務局長
右)Dr カレブ チョウジャリ
病院院長
今回の派遣にあたり現地での医療支援をサポートしてくださいました。

日本からのご支援はもちろん、現地ネパールでもたくさんの方に支えていただきました。
皆様ありがとうございました。

↑【在ネパール日本大使館吉岡医務官】

現地での滞在風景

宿舎は 3 軒が連なる長屋になっていて、暖房設備がなく非常に寒い環境でした。着る物で調節しながら毎日の活動を乗り切っていました。

海外医療派遣への思い

皆様のご支援・ご協力のもと、今回も無事に海外医療協力派遣を行うことができました。

今回の派遣でネパールと新たな繋がりを持つことができ、これからもこの架け橋を大切に育んでいきたいと思います。引き続きワンダイムへのご支援を宜しくお願い致します。